



episode.01

ニホンミツバチからの贈り物 ～黄金のはちみつ～

話し手 ミツバチ愛好家
おおやま しゅうじ
大山 修二さん (昭和30年2月4日生)

聞き手 鹿児島県立川薩清修館高等学校
1年 西之原 千花 1年 外園 唯花
1年 大城 拓摩 1年 玉利 悠也

「ニホンミツバチを育てようと思ったきっかけ」

私は、1973年に宮之城高校（現在は薩摩中央高校）を卒業して、大学で4年間農業について学びました。卒業後は、農協で技術員として働いて、50歳の時に早期退職したんです。その後は、コンサルタントとして農家のお手伝いをしていました。

養蜂を始めたのは2017年に友人がキンリョウヘン（ラン科の植物）を持って来たことから。「これを置いておけば蜂が来るんだ」というもんだから、安い重箱式の巣箱を買って置いたんですよ。でも、来ないんです。今では笑い話ですよ、そんな簡単に来るわけではないのに。

そこから、いろいろ調べたりする中で知人から鹿児島の名人を紹介してもらえて、その人からいろいろ教えて頂きました。

「ニホンミツバチを育てて」

ハチミツの生産っていうのは、ほとんどが輸入です。国内生産は全体のだいたい7%。

ほとんどが西洋ミツバチで、ニホンミツバチとなると全体の流通で0.1%だそうです。希少なんですね。飼育方法は、水分が循環する重箱式です。皆さんは働きバチの寿命は知っていますか。約1カ月と、とても短い。冬の蜂はあまり活動はしないから寿命が3～4カ月です。ウインタービーと言ってお尻が丸い蜂。この働きバチ達が短い一生をかけて集める蜜の量は、たったの小さじ1杯程度。本当に貴重なんですよ。

集める蜜は、この辺（薩摩川内市周辺）でいうと、ヤマザクラ、カラスザンショウ、クロガネモチなどから蜜を採っていますよね。野に咲く小さい花や広葉樹の蜜を季節ごとに集める贅沢なハチミツ



ですので、場所によって味も違う貴重な百花蜜です。おいしいハチミツは、甘いだけでなく深みがあり、採蜜してからも時間を置けば置くほど、おいしくなりますよ。

養蜂を始めてから、下を見なくなりました。上ばかり見ている。どこに花があるか、花の名前は何か、いつも気にしていますよ。

ニホンミツバチは、巣をスズメバチなどに襲われることがあるんです。この時、熱殺蜂球（一斉にスズメバチに襲いかかり、胸の筋肉を震わせて発熱し、集団でスズメバチを蒸し殺す戦法）をやっつけます。攻撃をするにも順番があって、先に行くのは、寿命の短い年寄りから攻撃するんですよ。おもしろいよね～。

「地域の過疎化について」

この辺も過疎化になっているでしょ。最近だと、過疎地域の空き家に物を置いておくと、誰も人がいないから物を盗られやすい。私は、そういう地域にも巣箱を置いているんです。

するとね、養蜂をしているとやらなきゃいけないことがたくさんあるから、その地域に朝行ったり、夜行ったりするんです。それが見回り行動になって、人が近づきにくくなるんですよ。そして、巣箱周辺の草払いもするから、地域の方から感謝されていますよ。

「若者に伝えたいこと」

養蜂は、凝り性だから、続けていますね。もし、車が運転できなくなっても、誰かが送迎してくれるなら、養蜂をずっと続けていきたい。

養蜂は勉強すればするほど面白いよ。蜂達は何も語ってくれないけどね。蜜を集める時もあれば、働かない時もある。他にも、スズメバチに巣をたくさんやられたこともある。どうしたらいいのかわかって考えることが多いよね。

何事もやってみて、失敗したら失敗したでいいのよ。だから、勉強する。勉強するか、しないかだよ。勉強すれば、いろんな蜜がたくさん取れるのよ。(笑)

